現状変更めぐり高まる懸念

中国の領土紛争

テイラー・フレイヴェル著

中国は、ここ数年、南シナ海、台湾海峡、中印国境地帯、そして尖閣諸島周辺海域でほぼ同時に地域の緊張を高める行動に出ている。いずれのケースも中国人民解放軍や中国人民武装警察に所属する機関（例えば、「中国海警」）が前面に出ており、国際社会において武力による現状変更に対する懸念が強まっている。

中国は、なぜこのような行動に出ているのか。

本書は、それについて考える上での判断材料を豊富に提供してくれる。著者で米マサチューセッツ工科大学教授のテイラー・フレイヴェル氏は、1949年に中華人民共和国が成立して以来中国が直面した23の領土紛争を包括的かつ理論的に分析し、中国がどのような場合に協調、あるいはエスカレーションを選ぶのかについて分析している。

「係争地域の価値」「支配力（占拠面積と戦力投射能力が判断基準となる）」「安全保障環境（国内外に存在する脅威の度合い）」という3つの指標に依拠して中国の行動パターンを論理的に解き明かす試みは、国際関係の理論に詳しくない読者にも比較的理解しやすい内容となっている。また、本書は、中国が抱える領土紛争の背景や経緯について丁寧に整理・説明しているため、中国関連の領土紛争の手引きとして用いることもできる。

日本ではどうしても尖閣諸島をめぐる中国の動向にばかり注目が集まりやすい。しかし、尖閣に対する中国の姿勢や行動は、実は台湾や南シナ海などの問題と密接にリンクしており、今後の日本の対応策を検討するうえで、中国が関与した領土紛争を全て網羅した本書の視点はおおいに参考になる。無論、本書では尖閣問題そのものに関する記述も充実している。

本書の英語版は、2008年に出版されたので、それ以降の国際政治の展開に照らしてフレイヴェル氏の理論を吟味するのも一興であろう。巻末の解説では、日本語版の監訳者である東京大学教授の松田康博氏がフレイヴェル氏の議論に対して今日の状況を踏まえた問題提起をおこなっている。専門家の間で今何が論点になっているのかを把握できるのも、本書の魅力だ。

原題＝STRONG BORDERS, SECURE NATION
（松田康博監訳、勁草書房・6400円）
▼著者は米マサチューセッツ工科大政治学部教授。

《評》東北大学教授　阿南　友亮